

正座：「日本人」を作る

橋 本 満

Seiza : Making the “Japanese”

HASHIMOTO Mitsuru

Abstract : The Japanese are supposed to sit *seiza* at formal occasions : legs on the floor, soles up on which to sit. For its difficulty to sit, the Japanese have less and less chances to sit *seiza*. But still they meet with many cases to sit *seiza* with enduring pain. I discuss how the *seiza* sitting was introduced, arguably around the beginning of the twentieth century, how it obtained the status of formal etiquette, and why. Why? It was to make the “Japanese.”

1. 正しい座り方

日本人は、あらたまつて座るとき、「正座」をする。脚を折り、膝を揃え、脛と両足の甲を床につける。臀部は当然、脚の裏から踝の上に乗る。だが、両膝はくっつけるのだろうか。足の裏は重ねるのだろうか、あるいは左右の親指を合わせるだけなのだろうか。細かくみると、正式の正座はどうすればいいのか、よくはわからない。膝を折って座っていると正座らしく見える。この拷問のような座法をひたすら我慢すると、数分後には足が痺れてくる。無理をして長く正座すると立ちあがれなくなる。

正座をして痺れない人たちがいる。僧侶は長い読経のあと、こともなげに立ち上がる。落語家も、噺が終るとすっと立ち上がる。茶道の宗匠は、茶をたてて、客にすすめ、終るまで釜の前に正座している。茶を嗜む人たちも、点前の間、正座で控えている。このような伝統的な場面では、訓練をした人たちは正座に慣れて痺れないようである。訓練をしていない「普通の」日本人には、正座はとても耐えられない。この苦痛を強いる座法が正しい座り方とされている。

明治維新以後、公的な空間は西洋風に改められ、公的な場面で「正座」することはなくなった。正式な礼法では、洋装で立礼をする。

伝統的な空間、あるいは場面においては、正座が求

められる。法事などの、家の「公的」な場面で、僧侶が読経をする間には正座を続けるのが礼儀である。読経が終ると、法事のフォーマルな部分が終ると、人々は聖なる儀礼が終ったと、ほっとして膝を崩す、胡座をかく。僧侶は、読経の聖なる時間の間でも、膝を崩して楽にするよう人々に促してくれるし、あるいは椅子が並べられた「西洋風」の場所が用意されていて、正座をしなくてすむこともある。正座が要求される機会は減っている。

結婚式にあってももちろん、神前結婚が戦後に流布してから、家と家とが千鳥に盃を交わす伝統的な形の婚儀は忘れられ、立礼で、あるいは椅子ですますことができる。正座であらたまる場面は少なくなった。

公的空間は西洋化され、伝統的行事の私的な「公的場面」においても、現代の日本人は正座をしなくなった。だが、正座は生き残り、時に正座の苦痛を経験しなければならぬ。なぜ、苦痛をともしない座法が、今もって日本人の「正しい」座り方なのだろう。

2. 端座：かしこまる

福島事件の河野広中は、獄中で端座していたと、読売新聞は書いている。謹慎を第一にして、終日端座して読書をしていたとある（『読売新聞』1887年朝刊3面）。

板垣退助は、正座が苦手であったという。洋服で出

かけていって、「洋服ではお辛う御座いましょう、…御安座を」と言われて「直にあぐらをかく、これが私の計略です」と言っていたと 1901 (明治 34) 年の記事にある (『読売新聞』1901 年朝刊 2 面)。

相撲取りが、袴をつけて端座した、と 1899 (明治 31) 年の記事にある (『読売新聞』1899 年 6 月 27 日朝刊 4 面)。高砂浦五郎の記念碑が完成し、盛大な祝いがあった。「長座の窮屈に堪へ兼て」、「人知れぬ様大胡座」をかいた。板垣のように窮屈な洋服ではなく、袴をはいていても、相撲取りに端座は堪えられなかった。「人知れぬ」とあるように、恥として受取られていたようである。

板垣は武士であったから、かしこまる、という機会も多くあったはずである。袴をつけ、脚を折って、畳あるいは床に伏せる、という座法は、身分の上の者に対して「かしこまって」いる態度を見せる身体技法である。この武士の作法に、板垣は「慣れて」いたはずである。だが、洋装では必ずしも正座をしなくてよかったので、「計略」に洋服を使った。

身分と作法には密接な関係があるが、明治に入ってこの関係は保たれなくなった。端座する、かしこまる、という礼法が人びとのあいだにただ広がったのである。その例が、洋装の板垣が端座をし、袴姿でかしこまった相撲取りが隠れて胡座をかいたことに表れている。あらたまった場所では、だれもがかしこまるという態度を示すようになったのだろう。河野広中は、謹慎を表すために端座をし続けた。新聞が褒めるように、端座を続けることは身体に苦痛を与えて心を表現する手段にもなった。

実際に、端座しかしこまる人は、明治に入ってどれだけいたのだろうか。河鍋暁斎の明治 20 (1886) 年前後の絵日記を見ると、人々はあまり正座をしていない。暁斎の家にやってきて暁斎に挨拶をするときは正座らしく座ってあらたまっている。その他の状況では、男は胡座をかき、女は膝を崩して、時に立て膝をしている (63, 73 ほか; 立て膝は 86)。挨拶をする時には、膝を揃えてあらたまっているように見える。だが、着物の裾から足首が見える絵では、指を床につけて足裏を立てて、踝の上に臀を乗せている (71, 92)。おおむね、着物がゆったりとしているので、両膝をくっつけているのか、足を重ねているのか離しているのか、よくわからない。あらたまっている場面では「正座」らしく見えるが、飲み食いをして談笑している場面ではゆっくりと座っている。実際のところ、着物の裾が足までをゆったりと覆って、どのように座っている

のか、足の組み方はどのようなのか、見えない。

3. しょうざ、せいざ

正座は、現在の日本語では「せいざ」と読む。「しょうざ」と読ませると、正面の座、第一の座、という意味になる (日本大辞典刊行会, 1980, 5 巻; 1203)。正を「しょう」と読むと、正面、正月、正席、から明らかのように、正しい、とか、フォーマルな、という意味は持たない。正解、正義、正統は、「せい」と読ませる (日本大辞典刊行会, 1980, 6 巻; 592)。

「正座」をかしこまる、と読ませる記事がある。落語家の圓遊がリューマチスを患って座れず、「病気の為に正座まる事不自由なるより大胡座を掻き居る始末」 (『読売新聞』1902 年朝刊 4 面) と、ルビを振って読ませている。この時期には、落語家は舞台上で「正座」をしたようである。だが、どのように足を組んだかは不明である。「かしこまる」とルビがふってあるので、現在の我々が考える正座とは異なるのかもしれない。

『聞蔵Ⅱビジュアル』で朝日新聞を検索すると、正座という言葉は戦前の記事には出てこない。端座は使われていた。正座がはっきりと使われるのは、戦後である。社会的に安定していない言葉であったのだろうか。読売新聞では、1920 (大正 9) 年 7 月 18 日朝刊 5 面に、選挙を巡る争いについての記事、「金と貧の争覇 (一)」の副題に「待合で正座し通した大塚氏、『樂觀説は敵』と貼紙す横山氏」とあって、正座には「せいざ」とルビがうってある。ただし、記事の内容からは、堅物の大塚栄吉が「悪友に謀られ待合に行くとき袴も脱がず威儀を正して一晩座り通した」とあり、どのように座ったかは不明である。待合では袴は脱ぐものであり、威儀を正す場所ではない、ということはわかる。この記事が、読売新聞での「せいざ」と読ませる正座の初出である。

戦後になると、「正座」は確定した言葉として使われる。例えば、警察が被疑者を拷問したとして、正座させたことを国会議員が糾弾した、という記事である (『読売新聞』1956 年 5 月 9 日 7 面)。正座は懲罰であったと批難している。あわせて、前近代的な、人権を無視した取調べとして糾弾もされている。

端座であっても、すでに 1879 (明治 12) 年の教育令において、体罰禁止の例としてあげられていた。長時間にわたって「かしこませる」のは、違法な教育方法と認識されていたのである (飯野・小熊, 103)。

膝を折って長時間座らせれば、拷問と認識されていた。

4. 座 法

日本人の座法についての研究は、おそらくこれが最初だと思われるのだが、大正時代の医学者、入澤達吉によって行われた。1919（大正8）年に行われた第四一回学術講演会の講演を、同年の『史学雑誌』第三編第八号に掲載したとある。入澤は、「膝を曲げて、畳の上に正しく座つて居る。是は吾々五千萬同胞に取つては、普通一般のことであつて、何等不思議もないことでありますけれども、初めて見た外国人などは、頗る之を奇異に感ずるのであつて、世界の珍風俗の一に算へられる位であります」（傍点は原著のまま。入澤，1921；1）と書き始める。日本人にとっては当たり前のことであるが、珍風俗だと言う。やはり医学者である丁宗鐵も、『正座と日本人』において、正座を「ほとんど日本人しかしない奇習と思われている」と書いている（32）。

イギリスの外交官、アーネスト・サトウは、*A Diplomat in Japan* において、「正座」について二度ふれている¹⁾。大名行列での礼儀としては、立ったままでの挨拶は儀礼とは認められずに、踵の上に座って頭を地面につけなければならなかった、とある（213-4）。欧米ではリチャードソン事件、日本では生麦事件として知られている事件の後の記事である。もう一回は、正月の宴会で、ミッドフォードと二人はクッションに寄りかかって座り、これは日本人の来客たちには失礼な座り方である、という描写がある（Satow, 1921；410）。

モースも、*Japanese Homes and their Surroundings* において、二ヶ所で座法にふれている。日本の住まいはプライバシーがないと言うけれども、日本の住まいを気に入っている、ただ、床に座るのは慣れるまではつらい、と書いている（Morse, 1886；12）。座り方を詳しく描写して、脚を下にし、尻をふくらはぎと踵の内側に乗せ、指先は内に向けて甲が床につくようにする、とある。外国人にはつらい姿勢であり、日本人でも外国に長くいたあとは堪えられない、とも書いている（124-25）。

ラフカディオ・ハーンは、*Glimpses of Unfamiliar Japan* で一ヶ所、日本人の座り方に触れ、着物を着ていないと座れないが、ハーン自身は慣れてくるとこの座法のほうが心地よいと書いている（Hearn, 1871,

vol.2；79）。「着物を着ていない」という描写は興味深い。

Things Japanese では、チャンバレンは、日本人の座法についてまったくふれていない。イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* にも、正座についての詳しい描写はない。

入澤と丁とが共に正座を「珍風俗」とか「奇習」と言うなら、幕末から明治に日本にやってきた西欧の人たちにも、珍しい、稀な座法と写ったはずである。だが、正座の座り方についての詳しい解説は少ない。もっとも詳しく描写しているモースは、日本人でも外国から帰ってくると苦痛であると言う。ハーンの解説が、自身正座をしていたので、西洋人にとっては非常に困難であるが、着物から日本風に変えれば心地よい、ともしっかりと説得力がある。苦痛なはずの正座でも、ハーンは日本の生活ではかえって心地よいという。西洋人にとって苦痛だとは言いが、珍風俗、奇習とまでは位置づけていない。

明治末から大正10年の間に、入澤が言うように、正座は珍風俗になったのだろうか。モースとハーンが見た、あるいは体験した正座は、この間に変形したのだろうか。

入澤も丁も、正座は古くから日本人が行ってきた座法ではないと結論づけている。入澤は、元禄の頃からはないかと言う（入澤，1921；24）。丁は、江戸時代中期、それも幕末に近い時期だろうという（丁，2009；68-69）。ただし、明治に入ってから急速に広まったと言い、熊倉の朝日新聞の記事（2006年8月4日）を参照して、正座という言葉が『小学女子容儀詳説』（1882）の初出としながらも²⁾、その頃の正座が現在の正座にあたるかと疑いをいれている。

入澤、丁、二人ともに、埴輪、仏像、肖像画、人物像をもとに、正座が古くからの座法でないと、彫像や絵画、そして作法書を参照して、座法の分類をしている。

公式的な座り方は、かつては胡座であった、という点でも二人は一致している。頼朝、秀吉、利休、家康たちの肖像、肖像画では、胡座をしている（胡座、と言ってよいかは疑問である。下で述べるように、丁の分類では安座であろう）。

入澤によると、座法には、真、行、草、とあるという（入澤，1921；3）。真の座位が、「日本流の坐り方」だとする。跪坐という座法の臀を落としたのが「日本流」であるという。跪坐には三つあって、「跪の一」は「膝から下の脚、則ち下腿と足の甲は、丁度日

本流に坐る時の如く、平に床に密着」し、「人を尊敬する場合の姿勢」だとする。「跪の二」は、「日本流の坐り方と同じ様で、雨膝は地に着けるが、足の甲は地に着けないで、雨方の踵で臀を支へ、雨足の趾は残らず足の甲の方に曲げて地に着け、それで、全身を支へ」る。「後方から覗けば、其人の足跡が全部見える」。「跪の三」は、しゃがむ、という座り方である(同:8)。跪坐のバリエーションとして、正座があることになる。「行」「草」といったくずれた座り方ではなく、日本流だけが「真」なのである。

さらに、結跏趺坐、半跏、樂坐、割座、とある。結跏趺坐は、あぐらの形に組んで、両足を太ももの上に乗せる。座禅の型である。半跏は、片方の足だけを太ももに乗せる。樂坐はあぐらに近いが、両踵を乗せるように脚を組む。割座は、正座のように座って、踵を横に開き臀部を床につける。割座は、とくに茶人の間で、一つの坐法になっているという(同:13)。

草の座り方として、歌膝、立膝、箕踞(ナゲアシ、とルビがふってある)、アグラ、とある。歌膝は、片膝を立てて、もう片方の脚をアグラのように折る。立膝は、文字通り両膝を立てる。箕踞は、両脚を投げ出す。アグラは、両足を組むように脚を折る。以上の座法の解説が、写真とともに解説してある(同:8-13)。

丁も図解して、座り方のいろいろを示している。正座以外に、安座、樂坐、割座、蹲踞、跪踞、建膝、があるという。安座は体の前で足の先を組む。このまま両足の裏を着けあうと樂坐である。正座の状態から、尻を床につけるのを割座、和式トイレのように足を自然のままに開いたまま腰を下ろすてうずくまるのを蹲踞、正座のつま先を立ててかかとお尻をのせるのを跪踞、正座の状態で片方の足を立て膝する座り方を建膝、としている(丁, 2009; 19)。

入澤は正座を特別なものとして、それ以外の座法を解説するが、丁は正座を基本として、そこから崩した座法として六つの座法をあげる。入澤は、中国などのアジアの座法との比較で日本の正座を論じるが(入澤, 1921; 14-17)、丁は着物の違いとして、チマチョゴリとの比較で論じるに過ぎない(丁, 2009; 98)。入澤の議論には、大正期後半の日本人としての意識が現れている。つまり、日露戦争後の戦間期の日本が国際社会におかれた位置づけと関わっているようである。

この頃、つまり明治末期から昭和初期にかけて、静座法が流行した。岡田式静坐法がもっとも有名であ

る。「静坐」が精神修養によい、といういわば心の修練として、知識人の間から広がっていった。要は、姿勢と呼吸法であり、正しい姿勢には健康な体と心が宿る、ということである(小堀, 2003)。創始者の岡田虎二郎はキューカーに関心をもっていたようであるし、ユニテリアンの岸本能武太はとくに熱心であった。岸本が日本基督教会設立にあたって、日本におけるキリスト教のあり方を模索していた時期にあたる(鈴木, 1979; 274)。

入澤の正座研究は、日露戦争以降の、西洋と日本という二項対立のなかで、日本とは何かという問題意識から始められたのであろう。丁の正座研究も、入澤の視点を継いで、入澤から 90 年たっても、「珍しい座法」という対西洋の観点から論じられている。

5. 服装の変化：洋服、和服

洋服が日本の正装となって、儀礼は変わってしまった。天皇は常に洋服を着ているし、食事も西洋風となった³⁾。

板垣も洋服で外出した。洋装することで端座を避けた。洋服のズボンで端座すると、脚の組み方、膝の開き具合、すべてあらわになる。膝を少々開いても、脚の上に全体中が乗る形は保たなければならない。つまり、足の両親指を重ねて、足の裏に臀を乗せている状態を続けなければならない。「お楽に」と勧められて、「安座」をすることが板垣の洋装の狙いであった。古い公的生活から、切り離れたのである。

袴ならどうだろう。脚を少々開いていても、つまり両親指を重ねずに臀部を床につけても、外見にはさほどははっきりとわからない。袴姿で端座すると、脚の形はかなり自由になる。端座する、あらたまる、には、裾の緩い服装が必要であった。かしこまって挨拶をすませば、「お楽に」と勧められなくても、袴の中で楽にできただろう。想像するに、少しあらたまった座法で挨拶をすませば楽にする、つまり端座は儀礼の一つのプロセスであって、そのまま長くかしこまり続けることは求められていなかったかもしれない。洋服なら、ズボンは脚を締め付けるし、脚の形は見えるから勝手に楽にもできない。板垣のように、「お楽に」と勧めさせるのが手段となる。

男性が洋服を着て役所へ出仕して、公けの空間はすべて西洋風に変えられていたから、礼法は立礼であった。特例として、和服による出仕が認められていた(『読売新聞』1881年3月9日朝刊1面)。明治に入っ

で最初に整備されたのは、礼法書の翻訳による欧米のマナーに準拠した立礼であった（熊倉，1999；163）。フォーマリティは西洋風が基準にされた。

女性の正装は、鹿鳴館時代に洋装が導入された。だが、在日外国人には不評であった（桜井，1984；26）。鹿鳴館時代が終わったあと、男性の正装は洋風化されたままであったが、女性の正装はむしろ「和装」で統一されていった。明治20年代以降である。

問題は、和服の形である。現在の女性の和服はおはしりをして、長い丈の着物の裾をあげて足の高さに合わせて着る。長さだけでなく、着物の幅を体の幅にきっちりと合わせ、タイトスカートのように着る。この着付けは、明治後期から大正末、あるいは昭和初期に完成したようである。同時に、模様にも西洋風さらにはインドやインドネシアの更紗などの意匠も取り入れて、華やかな着物になっていった（河原，2011）。

かつては、女性の着物は長く、裾をひきずっていた。もちろん上層の女性であり、家のなかの下男下女を監督することを仕事としていた。外出のときは、長い裾を手でたくし上げるか、紐で裾をあげて端折った（横浜開港資料館編『F. ベアド写真集1』，2006；162）⁴⁾。

女性が帯をつけているのを、下女と思われる若い女性が手伝っている写真がある。帯をつけている女性は裾をひきずるように着物を着て、手伝っている若い女は、丈を短く着て、前掛けをしている（『F. ベアド写真集2』，2006；86）。主従関係は明らかである。

かしこまる機会の多いのは、当然、身分の高い、「おひきずり」の着物の女性である。来客にフォーマルに（ただし、家のなかのフォーマリティ）挨拶をする。だが、長い着物の下の脚がどのように組まれているかはわからない（下田，1897；22-24）。

小笠原流礼法にのっとって作られたとされる、『通例祭典式』（高階，1894）によると、「正坐法右膝ヲ先キニ折リシキ左ノ膝ヲ後ニ折リシキ、臀下ニテ右足ノ大指ヲ下ニシ左足ノ大指ヲ上ニ重テ、左右ノ膝間ニ膝ヲ入ル、ノ間隙ヲ置キ少腹ヲ前へ出シ臀ヲ後へ出シ左右ノ手ヲ股ノ中間ニ措ク是レ平坐式トス」とある（『○坐法ノ事』ページなし）。「正坐」とあるが、続いて「左向着坐法」として左へ向って座する方法が書かれているので、現在の「正座」の意味ではないだろう。正面へ向くか、左へ控えて座るか、右へ控えるか、という座る位置が問題のようである。「せいざ」と読むかは不明である。この文章の内容からは、「しょうざ」と読むのが適切であろう。左右の親指を重ねることが

座法として重要のようで、両膝の開き具合、尻の脚へののせ具合、などの細かい指定はない。

いつ頃から、現在の正座のようなタイトな座り方になったのだろうか。大正の初めでは、女性はおひきずりでかきこまっていた。「正座」をしているはずだが、脚は着物の中にあり、足を重ねているのか、両膝をあわせているのか、よくはわからない。大正15年の『（改訂）女子作法教科書』の挿絵に、右端をきっちりと揃えた着物が、「座る時の手の置き方」というキャプションで掲載されている（綿抜・陶，2007；83）。さらに、昭和3年の『正しい日常の作法』の立ち方の説明で、「下り方。後に下るときの歩幅は、脚幅一分」とあって、裾が踝までの着物を描いて説明している（同；93）。

この挿絵からは、大正の後半から昭和のはじめに、着物を「おはしり」をして着るようになったことがわかる。現在の、裾を引きずらないで、足までの長さにして短くする着方である。タイトスカートのように着ると、「正座」での脚の形があきらかになる。両足の親指は重ねられているし、両膝はきっちりと揃えられている。着物の着方も変り、帯は広く、襟は高く首もとで重ねられる。大正半ばまでの着物の着方は、つまり、ゆったりと着るおひきずりの着物では、帯はやや細く、襟は低く交差して、襦袢の襟が広く見せられていた。和服はゆったりとして、いかにも動きにくい。昭和に入ってから着方は、女性の体の線をはっきりと示して、活動的である。

入澤は、この時期の着物の変化を知らなかったのだろうか。女性の着物が現在の着方へ変化していくなかで、彼は『日本人の坐り方に就いて』を書いていた。

着付けがこの頃から、婦人雑誌に取り上げられるようになる。明治38年創刊の『婦人画報』は、三越呉服店が「元禄衣裳」でブームを起したときである。日露戦争後、百貨店が日本に導入されて、消費ブームが起こったのである。新しい素材と意匠によって、着物は新しくなった。着付けは、明治45年の『婦人画報』にはじめて登場する。体型に合わせて「前の合せ方」「襟の合せ方」「胴のきめかた」を注意するようにとある（河原，2011；341-347；体型に合わせる着方は、347）。活動的でない「長袖裾広のぞりり」とした和服ではなく、外出できるおしゃれ着としての和服に変わっていった。明治末には、着物は現代風に近づいていたのである。

今和次郎の銀座での観察録についての記事で（『朝日新聞』1926年11月23日5面）、洋服の女性は1分

とある。男は 6 割 7 分であった。「モダンガールがうじゃうじゃいるようでも、これは目立つからであらう」と記事は解説している。今和次郎は、銀座を歩く女性たちの着物の変化には注意していないが、彼の得意の挿絵からは、『婦人画報』が示した着付けのとおり、体型に合わせた着物を着ている。外出着としての着物が定着していたのである (今和次郎, 1971: 図 10, 71)。この着物を着る男女の比率のあとに、今和次郎は、襟の形、帯の幅、などの種類も図解している。今和次郎も、入澤と同じく、女性の着物の変化のなかで、銀座の女性を観察していた。けれども、女性の着物を和服という一括りのなかで見ていた。

6. 礼 法

近代日本の最初の礼法書は、西洋のマナーの紹介であった (熊倉, 1999: 163-66)。鹿鳴館時代に、西洋のマナーを修得することはエリートとしての必須であった。男は帽子のかぶり型、コートの着方、挨拶、会釈、座り方、立ち方、別かれ方まで、すべて新しい馴染みないエチケットであった。テーブル・マナーからダンスの仕方まで、すべてを学ばなければならなかった。新しい時代に、維新の「革命家」たちは、日本の新しい紳士として生かわらなければならなかった。1891 年の『国民之宝: 日用百科, 第 4 巻 学芸編 上』には、西洋の礼法の次に日本の礼法を載せている。「真の礼」「行の礼」「草の礼」と区分して、手のつき方、礼の深さで区別している。入澤はこれを参照して、真・行・草の三形態を分類したのである。つまり、高貴への礼、同輩への礼、下輩への礼である。身分制を残しながらも、明治以前なら接することが少なかった、差異のある社会層に属する人びとの間の関係が増えて、新しく設けられた、おそらく西洋礼式に近づけられた、簡素化された礼法が解説されたのであろう。エリアスの文明化が示すように、粗暴な戦闘者たちが西欧化された文化的エリートに変身するプロセスが (エリアス, 1977: 57), 鹿鳴館時代の日本の権力者にも同様に見られたのである。新しい礼法の導入は、西洋に準拠した日本の「文明化」を目指すものであった。古い日本は野蛮であり、明治の日本は「文明化」されなければならなかった。

三輪肇蔵編輯『小学男女普通諸禮法』が 1883 (明治 16) 年に出版されている。「人の禽獣に異なる所以は、長幼貴賤の種あるが為なり」から始まり、「恭敬の心内より発し、坐作進退の儀となる」、さらに「我

国の古礼は、今其詳なるを考うべからず、中世足利氏の時、伊勢小笠原の二氏、礼典を掌り、遺風伝えて今」に至っていると「緒言」に言う (現代表記にあらためた)。古くから伝わる小笠原流の礼法にのっとっているし、礼法は人間であることの証であるし、強調されるのは「長幼貴賤」の間の区別であった。図解があるが、描かれているのは男であり、女の姿は補助的でしかない。題に男女とあるが、主には男の礼法であって、女には礼法が必要ないかのようである。

下田歌子の『女子普通禮式』は、1897 (明治 30) 年に出された女性のための礼法書である。「西語に曰く『礼法に習熟せずして社会に立たんとするものは、非凡の資質無』かる可からず」(下田, 1897: 2) と、社会に出るための必須だと礼法を説いている。さらに、ヨーロッパでは、「男女に限らず」、「礼法を知らざる時は、人目して、彼れは紳士にあらず、貴女にあらず」と言う (同: 4-5)。礼法を知らない者は男女ともに紳士貴女になれないのである。さらに、古い礼法が残り、西洋の礼式が導入され、つまり、「公武及び泰西の作法、相い混合して、一種新様の礼の行わる今日、或部分は猶未だ判然たる定則も立たざる」と、明治中期の礼法の混乱を批判して、学ぶべきは「礼の精神」であり「技術には余りに拘泥せぬこそよけれ」と精神が基本であると主張する (同: 6-7)。まさに「文明化の過程」である。このあと、座法を解説し、膝、両手、脚の置き方を細かに描写し、具体的には他の礼法とさほど違いがない。さらに、椅子の座法についても指示がある。

下田の礼法解説は、女性に向けた教育である。女学校の制服も西洋風であった。洋服の裁縫も教えられた (桜井, 1982: 1-13)。ところが、明治 20 年頃から和服への転換が起こり、女学生の制服に袴が取り入れられるようになった。明治 30 年代からだという (桜井, 1984: 30)。この時期に、下田の礼法書は、女性に向けて、近代における女性になるための「礼法」を説いた。学校教育を受け、社会に出るために必要な礼法を、西洋を基準にして身につけるべきであるとしたのである。

三輪は「心内より発し」と言い、下田は「礼の精神」を学ぶべきだと言う。さらに下田は「社会に立たんとするものは」と女性に向けて説く。三輪は上下関係に拘泥するが、下田は「礼法を知らざる時は、人目して、彼れは紳士にあらず、貴女にあらず」と述べて、貴賤は礼法を知る者と知らない者との間の差異であるかのように主張する。この時代のあとに、岡田式

静座法が流行する。心のあり方が問題とされていく。礼法は立ち居振る舞いの形式であり、静座は姿勢と呼吸法という身体の鍛錬から心のあり方に向う。心が問題なら、誰もが心を表現できる簡素な礼法があるべきであるし、礼法の形式にのっとれば誰もが心を表現できるなら、身分差はますますなくなっていく。

大正時代の生活改善運動が健康的で機能的な洋装をすすめたにもかかわらず、洋服はそれほど普及しなかった（坂本，2010；128）。公的な洋装よりも、新しいマナーに合う和装が女性に広がったのであろう。着物をきる女性は、伝統へ戻ったのではなく、新しい和服を身につけたのである。新しい和服には、新しい礼法があった。

跡見学校は、幕末から明治にミッションスクールが次々と開校されるなか、跡見花蹊によって日本人の学校として1875（明治8）年に始められた。跡見花蹊は、宮中女官を手本とする女子教育を旨として、国語、漢文、算術、習字、絵画、裁縫、琴曲、插花、点茶を教科として採用した（加藤，2007；270）。跡見学校は、高等女学校令にあわせて、跡見女学校へと変遷していくなかで、英語を正式科目に取り入れながら、点茶を教科として保っていた（植田，2004）。女性の嗜みとして、茶道が女子教育に定着していったのである。

跡見学校だけでなく、1888（明治21）年には、京都府立高等女学校に点茶が置かれた。1891（明治24）年には、華族学校にも茶道が加えられた（加藤，2007；267）。服装だけでなく、女子教育の和風化は教科にも及び、茶道は裁縫、花とならんで必須の科目と位置づけられた。和風の礼法は、茶道を通して浸透していったのである。

7. 女性への浸透：茶道の変化

茶の湯は男のものだった。江戸時代の茶の湯は、接客、飲食の礼法を、小笠原流にしたがって、細かく決めていた。大名、豪商が、器や部屋の飾りに贅を尽す、高級文化であった（キンスキー，2002）。

明治維新によって、とくに大名の庇護を失った茶道は、新しい権威である華族に、そして天皇に接近していった（廣田，2012）。さらに、政界、官界、財界にわたるネットワークを媒介する役割を茶道は担った（斎藤，2007）。これは、江戸時代の大名茶の延長線上にある、男の茶である。

同時に、女学校への浸透がはかられた。京都の女紅

場（前出，京都府立高等女学校）で、茶道が教科として始められた。女性の嗜みの始まりである。女紅場は、英語、国語などの学問だけでなく、裁縫、生花、点茶を通して、新しい教養を明治の新しい女性につけさせる学校であった。1890（明治23）年、明治天皇の皇后は女紅場を訪れ、裏千家家元が点茶を披露している（廣田，2011；91，注57）。ここに、新しい権威と結びついた茶道が、女性の教育という新しいマーケットを獲得した。

茶道は、学校教育、とくに女子教育の中に位置づけられ、生花と並んで、女性のマナー教育の科目となっていく。跡見学校が教育のモットーとした良妻賢母⁹は、明治から第二次世界大戦の敗戦まで、日本女性の伝統美として維持された。良妻賢母という言葉が国家的バックボーンを失っても、しとやかな日本女性として学校教育の場に生き残った（Surak，2012）。20世紀なかばにおいても、お茶とお花が「嫁入り道具」の必須とされたのである。

8. 礼法と武道

嘉納治五郎は、減びつつあった柔術をまとめて、近代的な柔道へ再編した。嘉納治五郎が「発明」した柔道は、合理的近代的なスポーツであった。だが、学校教育に取り入れられ、さらに警察や軍隊に浸透すると、武道という日本精神を担う「文化」としての役割を担わされるようになる。武道の礼法は、礼法として日本精神を具現するものとして再編成される（Inoue，1998）。剣術も、柔道にならって、剣道と名前を変えて、竹刀と防具をつける「スポーツ」へ変質した。

柔術、剣術が、それぞれ柔道、剣道に姿を変えて、礼法をもつようになった。とくに、武道場の正面に神棚が置かれて、道場への出入り、試合前の挨拶などが細かに規定されたのは大きな変化であった。武道場に神棚が設けられるようになったのはいつ頃からだろう。中村は、道場が床敷きになり、壁で囲われ、神殿が備え付けられたのを大正年間と想定する（中村，1986；38）。

嘉納治五郎は、宗教は個人的な信仰であるから、というひじょうに近代的な観点から、道場に神棚を設置することに反対していた。だが、昭和12年、講道館の道場に、圧力に抗しきれず、神棚を置くことを認めた（中村，1987；7-8）。

大日本武徳会は、嘉納治五郎の講道館よりも早く、道場に神棚を置き、道場の退出、試合前の挨拶に、神

棚との関係を意識した礼法を導入した。すでに 1895 (明治 28) 年、第一回武徳祭において、演武場の北側中央に仮神殿を設けている (中村, 1987; 5)。警察関係の武道場は、大日本武徳会と密接なつながりがあったので、早くから神棚を道場に設け、礼式を取り決めていた (同上)。

神棚と関連して礼式が設定された事情がわかるのは、1917 (大正 8) 年の「大日本帝国剣道形」の加註にある、「礼ハ先ツ正座 (玉座又ハ神殿) ニ向テ敬礼ヲ為シ」である (中村, 同上)。正座の括弧内に、玉座又ハ神殿、とある。ショウザと読むときの意味である。1916 (大正 7) 年の、板倉定四郎編『剣術教授書』(日本武道会)には、精神修養の側面を強調して、「端坐安坐の他姿勢を崩すべからざること」という心得を掲げている (同上)。現在の用法での正座は使われていない。安座は、丁の解説なら、きちっと脚を組んだ胡座のような座り方である。正座のまま、膝を開いて、臀部を床に着けた形である。この座法では、姿勢を崩したことにはならなかった。

試合前の礼はどのようなものであったろうか。講道館では、乱捕りの礼を採用したらしい。「(両)足ヲ爪立テ両膝ヲ屈シ両手ヲ畳ニ突キ上体ヲ前ニ下ゲ」て礼をした。1906 (明治 39) 年に、講道館と大日本武徳会との間に正式の礼として採用され、両膝をついて爪立てた姿勢よりの礼 (座礼) が次第に一般化していった (中村, 同上; 9-10)。相撲で試合前に行う蹲踞である。ところが、竹田浅次郎著『柔道-試合の業掛る時機-教典』(服部文貴堂, 1941 年)には、「礼が終つて立つ時は右足を少しく前に踏み出して膝立ちで立上る様にし、両足を一度に踏んで、殊に強く踏みつけて立上る様なことをしては礼を失するから決して行ってはならない」と記されている。また、石黒敬七の『柔道・其の本質と方法』(旺文社, 1943)には、「不動ノ姿勢より正坐スルニハ、先ツ左足ヲ其ノ爪先が右踵ノ線ニ至ル位ニ退キ、上体ヲ徐ロニ下ロシ足先ハ爪立テツ、左膝ヲツキ次ニ右足ヲ退キ足先ハ爪立テツ、左膝ト揃ヘテ膝ヲツキ両足ノ爪先ヲ伸バシテ足ノ親指ト親指トノミヲ重ネ鳩尾ヲ落シ脊椎ヲ真直ニ落チ付ケテ正坐ス」、また、正坐より立ち上がる動作として、「正坐ヨリ立上ルニハ、先ツ上体ヲ浮カシ両足ヲ爪立テ、立上ル準備ヲナシ、次ニ坐ルトキト反対ニ右膝ヲ立テ、其ノ足ニ重ミヲ託スル気持ニテ立上リツ、左足ヲ右足ニ揃フ」とある。これは、1940 (昭和 15) 年に、講道館と大日本武徳会との間で合意された礼法をそのまま掲げたものだという (同上; 10)。

この座法で言う正座は現在の正座であるし、この起居の方法は、明治の礼法にのっとったものである。つまり、小笠原流を簡素にして作られた礼法が、ようやく 1940 (昭和 15) 年になって、武道の正式の座法として確立されたことになる。乱捕りにおいて正座から礼をする礼法が定着するのは、戦後のことだともいう (中村, 同上)。

武道場に神棚が設けられ、神棚へ向っての礼法が定められて、さらに試合前の礼法も蹲踞から正座へと変更されていくのは、第二次世界大戦の始りから戦後までのことであり、ようやく「正座」が完成したことになる。

9. 支配の道具としての文化

昭和のはじめまでに整ってきた「正座」は、「珍しい」座法を修得することで、日本人に日本人らしさを与えた。さらに、「日本人らしく」させるターゲットとなったのは女性であった。「ぞろり」として動きにくい和服を、出歩きやすいタイトな着物に変更して、「日本女性」という単一の存在に変身させた。

農村には、労働着としての着物を着る農婦がいた。野良着は第二次大戦以降も、長丈の着物をおはしよりで短くして労働着としていたが、筒袖の対丈に前掛け、という労働着としての着物も維持していた (古川・豊田幸, 1982)。都市の働く女性はおはしよりをして着物を着ていた。女性の地位と仕事によって、異なる着物があった。この労働着風に着る、動きやすい着物が、上層部にも浸透して動きやすい和服となり、さらに、「しとやかな日本女性」が作り出されたのである。

常におはしよりをしてしとやかに振る舞う女性は、大正期半ばからの礼法書、婦人雑誌の着付けに出現した。タイトな活動的な「新しい着物」として日本女性の間に広がったのである。かつての身分と着物の間のつながりは、新しい日本女性の出現によって絶ち切られた。新しい和服を身にまとった「しとやかな」日本女性が、非活動的な「ぞろり」とした着物を着た古い女性にとってかわったのである。

植民地政策の一翼を担って、朝鮮においても日本流の女子教育が進出していった。女学校では、日本のカリキュラムにしたがってお茶とお花が教えられた。植民地朝鮮の女性は、植民地/被植民地と男性/女性という二重の格差のなかで、日本人に変えられた。日本が推進した近代化のなかで、朝鮮の女性は、西欧的改

革によって伝統的朝鮮社会からは解放されたが、同時に、日本の女性が新しい女性に生まれ変わらされたように、日本の礼法によって「日本女性」にされたのである。

1912（明治45）年、朝鮮公立高等女学校官制・規則公布によって、日本の高等女学校令と同じ制度が導入された。作法が修身の一環として教えられ、華道、茶道が、正課とは限られなくても、取り入れられた。日本人女学生だけでなく、朝鮮人女学生も同じく、日本人らしい作法を身につけるために、茶道を学んだ。ただ、「足が痺れて痛かった」（小林，2013；217）だけだったという「思い出」からして、フォーマルな場での修得が要求され、とくに戦争が厳しくなってくるなかではよりきびしく求められた。だが、日本人の生活を日常的にはしない朝鮮人女学生にとっては、学校という日本が作ったフォーマルな場でだけの「作法」でしかなかった。

植民地において明らかなように、「正座」は政治化していった。剣道において、試合前の正座による挨拶が定着したのは、昭和18年以降、さらには第二次世界対戦以後においてであった。あるいは、女性の着物がタイトになるに従って、正しい「正座」が求められるようになった。大正期後半から昭和期初期である。この時期に、「正座」という座法が、「しょうざ」ではなく「せいざ」として確定されてきたのだろう。

ただし、フォーマルな礼法はあくまで立礼であった。明治43年には、天皇に向う最敬礼の角度は45度とされた。敬礼は30度であり、会釈は15度である（薄井，2005；3-4，注6）。

立礼がフォーマルなのに対して、座礼である正座はあくまでインフォーマルである。天皇に対してのみ行われた最敬礼は、立礼であり座礼ではなかった。座礼は、近代日本において、公的空間での礼法ではなかったのである。

天皇への土下座は野蛮であるという批判的な記事（『読売新聞』1965年10月27日朝刊3面）が、戦後の、天皇の靖国神社参拝にあたって載せられている。戦前ならありえない距離で天皇を拝するのに、土下座をした一般参拝者を、あるいは土下座をさせたこと自体をを批判しているのだが、戦後のことであるから、野蛮であるとか封建的であるという判断があった。戦後のこの時、戦中に確立された正座が持ち出されて、戦後民主主義の判断で評価されている。天皇への最敬礼という礼法は忘れ去られていて、土下座をする者、あるいはさせた者、土下座を批判する者、ともに公的

空間で天皇を迎える儀礼が「最敬礼」であることを忘れていたのだろう。私的場面での公的な礼法である「正座」が、靖国神社の境内で行われたのだった。

天皇は、敗戦によって、神的存在から「人間」になったが、「人間天皇」に対する礼法は確立されていなかった。公的儀礼がカバーしない場面で、日本人一般が天皇に向う時にとった礼法は、正座で頭を下げる、という私的空間での最高の儀礼しかなかった。靖国神社の境内は野外なので、そこで正座をすれば土下座になる。天皇は、はじめて、私的空間におけるフォーマルな儀礼によって、日本人に迎えられたことになる。戦後の新しい天皇制は、文化によって新しい「支配」のフォーマリティを与えられたのである。

10. 儀礼の発展の法則：普遍化と簡素化

エリアスの文明化は、ヨーロッパ中世において野蛮であった支配者が宮廷文化によって文化を手に入れるという過程を描いている。近代のはじまりにあっても、礼法書の流布によって人々はエチケットを身につけてブルジョワジーになった。ハバースなら、近代における公的空間の形成である（Habermas, 1991；31, 164）。

エリアスのように語れば、日本の文明化は、室町時代にさかのぼる伝統に基づいて、江戸中期に入って礼法が完成したと言えるだろう。小笠原流、伊勢流などの武家儀礼が確立されて、戦国武将の野蛮は文明化された。もちろん、身分によって細かく文化された礼法であった。挨拶、衣裳、食事、乗り物など、生活の細かい面について、上下関係が表現できるようなきびしい儀礼の形があった。

明治維新によって、古い礼法は幕藩体制の身分制とともに棄てられた。近代的な西洋の礼法が導入され、その上に近代日本の礼法が再建された。小笠原流の礼法にのっとりながらも、近代（西洋）風の礼法が、日本にあわせて作り直されたのである。

日本風は野蛮であり、西洋風の礼法によって文明化された。天皇をはじめとして、近代的公的空間では、洋装の人々（新しい支配者）が、西洋風のエチケットを身につけることで「文明的日本人」になった。板垣退助が洋装で出かけて正座を免れようとしたのは、文明的日本人の洋装によって、正座を、かしこまることを、古いしきたりとして崩せたからである。洋装で私的空間へ入れば、私的空間の伝統的「公的」マナーには束縛されない。

他方、西洋風でない日本人は多数いた。新しい公的空間で洋装をしていた人たちでも、私的空間では和服でいた。この私的空間におけるフォーマリティは別にあった。西洋的な国家レベルのフォーマリティとは違う、いわば伝統的な「公的空間」におけるフォーマリティである。この公的空間は、近代国家から見ると、私的である。けれども、国家につながる結婚や葬式は、伝統を守りながら、つまり私的でありながら、公的でなければならない。ただし、明治以前の身分差を払拭しながら、それでも上下関係を維持する儀礼には従わなければならない。

「真」「行」「草」の儀礼の格差はここで作り出されたのだろう。上位へ、同輩へ、下位へ、という関係で、座り方と頭を下げる角度で規定された。この礼法にすべての新しい日本人が従えば、私的空間においても「文明化」された日本人になれる。さらに、すべての日本人がたやすく守れる、上、同、下、という三つの関係に簡素化される。礼法の簡素化は、社会関係の変化に通じる。

「日本伝統」の礼法が簡素化されたのに対し、鹿鳴館時代に導入された西洋式の立礼はかえって複雑化をたどった。座礼にしたがってのことであろう。天皇に対する最敬礼がもっとも深く頭を下げる礼であり、45度まで下げ、手はまっすぐに地面へ向ける。敬礼は30度、会釈は15度、という三種に分類された。数的に処理すれば、関係は連続的になる⁶⁾。立礼にしる座礼にしる、日本人は三種の人間関係に注意をして、関係の上下の場面にふさわしい礼の形をとればよいのである。礼法の普遍化と簡素化である。ただし、立礼においては通常は二種である。最敬礼は天皇に向ってだけであるから、通常の社会生活ではありえない。つまり、西洋的近代空間における立礼の礼法は、座礼よりも簡略であり、礼法によって表現される人間関係はより単純なのである。

図式的に言うと、国家レベルの公的空間は西洋化されて最高の権威を持ち、私的領域では、共同体や家族レベルでの伝統的な「公的空間」があり、さらに私的に最もフォーマリティにとらわれない礼法がある。公的な西洋的儀礼でも、最も私的な家庭内の礼法でも、新しい近代的日本人を表出する形が確立されて、この礼法を実践することによって、近代国家日本のなかの「日本人」になれたのである。

11. 日本人を作る

西洋的な国民国家は、一元的な国民を求める。江戸期の礼法は、日本人を身分によって細かく区別して、身分によって従うべき礼は異なっていた。たとえば、食事の礼法では、最高級の七五三という膳から、最下級の、縁側での折敷による一汁二菜という区別がなされていた。それでも、この宴に参加できる身分は限られていた(橋本, 2010; 51)。近代国家の形成にあたって西洋式礼法が導入されて近代日本の礼式が作られ、この新しい日本の近代的礼法に従えば、近代日本の「日本人」になれたのである。

伝統的儀礼は、近代国家の公的場面から消し去られ、人々の日常生活のなかに保持された。私的空間における「公」である。それでも、伝統的身分制度は保持されることなく、「国民」としての一体化が図られた。礼法は簡素化されて、国民が等しく行える身体技法へ変換された。つまり、私的空間で行う「公的」儀礼は、近代的公的空間に接続されて、一体としての「国民」が作られたのである。公的空間では最敬礼を最高の礼法とする立礼が定められており、私的空間では「真」「行」「草」の礼の形、あるいは「目上」「同輩」「目下」に対する礼という関係性を基準にした身体技法として定められ、「草」で「目下」に対する礼は、公的空間の立礼の最も軽い「会釈」につながる。天皇をのぞくすべての日本人は、「上」「下」「同」という単純な関係に再編された。

正座は、この礼法のシステムにおいて、私的空間の公的側面をささえる基本の形であった。「真」の礼である。頭を下げる角度を変えれば、「目上」「同輩」「目下」の関係を表現できる。

男性は、公的空間の礼法に従えば、私的空間における礼法にもつながるので、国民、あるいは日本人になりやすい。だが、女性は、近代国家の公的空間に直接には参入できず、それでも「公的」に自己表現をしなければ、日本人になれない。「良妻賢母」は、女性を私的空間に留め置きながら公的に国家に参画させる格好のスキームであった。近代の日本人を作り出す上で、女をどのように扱うべきかという woman question は、この良妻賢母のモデルによって解決できる(Rabinovitch, 2001; woman question は 345-56; 良妻賢母との関係は 354-355)。正座をいかなる場所で、どのように教えるか、というのが、woman question を解消する鍵であった。

場所は学校である。女性、とくに明治期においては、上層の女性を教育する際に、外国語と同時に茶道でもって、知識と礼法を教えた。

お花とちがって、茶道は立ち居振る舞いから、手先の使い方にいたるまで、細かな身体技法を要求する。女性に茶道を教え、女性の座り方として正座を導入することで、「かしこまる」という公的空間の礼法を身につけさせる。加えて、大正期から昭和期に、女性の着物が「近代的」和装として変化して、露わに正座の形を確認できる。国家の公的空間には女性を出さないけれども、近代的日本人として、生花の枝のように女性を「矯めた」のである。

男性も、もちろん「矯められ」た。女性には許されなかった剣道と柔道において、礼法は神棚の前での身体技法として浸透がはかられた。道場の出入、試合に臨んでの礼、座位の取り方、などの細かな規定は、正面の神棚との関係で決められた。道場は国家レベルの公的空間ではないけれども、礼法を媒介にして「神国日本」に日本人を直結した。正座が基本とされたのは、昭和の軍事体制に入ってからなのである。

正座のこの思い出は、戦後の混乱のなかに保持されていく。ひとたび「伝統」となった正座は、支柱であった国家体制が崩壊したあとも生き延びて、あらゆる「公」の場面の正式の座法となっていく。日常生活のなかでの基本的な、そして正しい座り方、日本の伝統的座法、として、誰も疑わない身体技法になった。

儀礼が乱れた、さらには集団生活に齟齬を生じた、という際にはからならず、正座が復活される。あるいは、規律が糾された、として、正座ができる、正座をする、正座をさせる、という「儀式」が、力を獲得してきた。体罰として正座が強要されるのが、公的空間に「私」をつなげる空間として継承されてきた教育の場（公教育であれ私的な芸の鍛錬の場であれ）であることは、偶然ではない。

注

- 1) 日本語訳ではなく、原文を sitting で検索した。「正座」と意識してあることを恐れた。モース、ハーン、チェンバレン、パードについても同様である。
- 2) 国会図書館の近代ライブラリーで『小学女子容儀詳説』を瞥見するかぎりでは、端座は出てくるが正座は見つけられなかった。
- 3) 明治五年の正餐において天皇ははじめて牛肉を食べたとされる。橋本（2012; 52）を参照。
- 4) 長崎大学附属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース <http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp/jp/> には、ベアドの他に多くの写真がコレクションとして

あげられている。

- 5) 日本の女子教育の基本理念として、跡見女学校で採用され、のちにいくつもの高等女学校に広がった。19世紀の後半から20世紀のはじめに、アメリカでも女性教育の理念として“republican woman”がとりあげられたが、日本と同じ文脈で論じられた。Rabinovitch（2001）を参照。良妻賢母は日本独自のイデオロギーではないようである。
- 6) デュルケムは刑罰の進化について、禁固刑が年数で規定されることによって、刑罰の平準化が起こると論じている。『刑罰進化の二法則』を参照。

参考文献

- 『朝日新聞』（『聞蔵II ビジュアル』）
- Bird, Isabella L. 1911. *Unbeaten Tracks in Japan*. John Murray.
- Chamberlain, Basil H. 1905. *Things Japanese* John Murray.
- 日本大辞典刊行会 1980『日本国語大辞典』5巻、6巻 小学館
- エリアス、ノルベルト（赤井・中村・吉田訳）1977『文明化の過程』（上）法政大学出版局
- 古川智恵子、豊田幸子 1982「北設楽地方における女の仕事着に関する調査（第1報）－戦前を中心として」『名古屋女子大学紀要』28, 1-10
- Habermas, Jürgen. 1991. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, translated by Thomas Burger with the assistance of Frederick Lawrence. The MIT Press.
- 橋本満 2010「日本料理の発明：近代的『美味しさ』が作った日本の階層」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』46, 9-58
- Hearn, P. Rafcadio. 1871. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. feedbooks.
- 廣田吉崇 2011「近代における茶の湯家元と天皇との距離－天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上－」『日本研究』44, 77-130
- 2012「明治前期の『貴紳の茶の湯』－『轍仁親王日記』および『東久世通禧日記』にみる喫茶文化の状況－」『日本研究』45, 185-236
- 飯野守・小熊伸一 1999「生徒に対する教師の懲戒権の研究－中学校を中心として－」『文教大学女子短期大学部研究紀要』43, 103-110
- Inoue, Shun. 1998. “Invention of the Martial Arts: Kanō Jigorō and Kōdōkan Jūdo,” Stephen Vlastos ed., *Mirror of Modernity: Invention of Traditions in Modern Japan*, University of California Press, 163-173.
- 入澤達吉 1921『日本人の坐りに就いて』杏林舎
- 加藤晴美 2007「女子教育と茶道－明治期の展開－」『ブルー学院大学研究紀要』47, 266-272
- 河原和枝 2011『『きもの』というファッション－消費文化のなかの『伝統』ひろたまさき、横田冬彦編『異文化交流の再検討－日本近代の〈経験とその周辺〉』平凡社、346-51
- 河鍋暁斎記念美術館編 2013『河鍋暁斎絵日記』平凡社

- キンスキー, ミヒャエル 2002 「礼は飲食に始まる - 近世日本の作法書をめぐって -」『人文学報』 86, 97-142
- 小林善帆 2013 「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法 - 植民地台湾との相互参照を加えて -」『日本研究』 47, 207-237
- 小堀哲郎 2003 「近代日本の民衆生活と身体」早稲田大学人間科学研究科博士論文, 15-31
- 今和次郎 1971 『考現学』今和次郎集第 1 巻, ドメス出版
- 熊倉功夫 1999 『文化としてのマナー』岩波書店
- 三輪堅蔵編輯 1883 『小学男女普通諸禮法』浪華宝文軒 (国会図書館近代デジタルライブラリー)
- Morse, Edward S. 1886 *Japanese Homes and their Surroundings*. Peabody Academy of Science.
- 中村民雄 1986 「武道場と神棚 (1)」『福島大学教育学部論集』 39, 35-51
- 1987 「武道場と神棚 (2)」『福島大学教育学部論集』 42, 1-17
- Rabinovitch, Eyal. 2001. "Gender and the Public Sphere : Alternative Forms of Integration in Nineteenth-Century America" *Sociological Theory*, 19 : 3, 344-370.
- 斎藤康彦 2007 「近代数寄者のネットワークと存在形態 - 高橋箒庵『茶会記』を素材にして -」『山形大学教育人間学部紀要』 9, 304-318
- 坂本佳鶴恵 2010 「洋装化と女性雑誌——戦前の関与について」『お茶の水女子大学人文科学研究』 6, 123-134
- 桜井保子 1982 「日本における洋服受容の過程 - 明治前期 -」『中国短期大学紀要』 13, 1-13
- 1984 「日本における洋服受容の過程 明治中期」『中国短期大学紀要』 16, 24-33
- Satow, Earnest M. 1921. *A Diplomat in Japan*. Seeley, Service & Co. Limited.
- 沢田誠武編 1891 『国民之宝：日用百科』第 4 巻 学芸編上』高山堂 (国会図書館近代デジタルライブラリー)
- 下田歌子 1897 『女子普通禮式』博文館 (国会図書館近代デジタルライブラリー)
- Surak, kristin. 2012. "Nation-Work : A Praxeology of Making and Maintaining Nations," *Archives Européennes de Sociologie*, 53 : 2, 171-204
- 鈴木範久 1979 『明治宗教思潮の研究——宗教学事始——』東京大学出版会
- 高階幸造編 1894 『通例祭典式』兵庫県皇典講究所 (国会図書館近代デジタルライブラリー)
- 丁宗鐵 2009 『正座と日本人』講談社
- デュルケム, エミール (織田年和訳) 1983 『刑罰進化の二法則』作田啓一編『人類の知的遺産 デュルケム』講談社, 292-328
- 薄井明 2005 「〈日本近代礼法〉の形成過程 (3)」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 12, 1-8
- 綿拔豊昭・陶智子編著 2007 『絵で見る 明治・大正礼儀作法事典』柏書房
- 横浜開港資料館編 2006 『F. ベアド写真集』 1, 2 明石書店
- 『読売新聞』(『ヨミダス』)